新見公立短期大学紀要　第30巻
pp. 151-159, 2009

報　告

3年課程短大看護学科におけるFD活動5年間の取組みと評価

―「研究・研修」体制の活動報告―

古城　幸子*・杉本　幸枝・内藤　一郎・木下　香織

看護教育学

(2009年11月18日受理)

2004年から開始した3年課程短大看護学科におけるFDの5年間の活動報告である。看護学科の運営方針の中に,「研究・研修」体制を組み込み，教員の教育・研究能力の向上を目指すこととした。さらに，2006年度からは，研究・研修に関する年間の企画運営を行う学科内役割として「研究・研修委員」を設置した。活動内容は,「スーパーバイズシステム」の構築と効果的な運用,「ランチョンセミナー」による教員相互の研究能力の向上,「教育・研究発表会」の開催による実習施設や地域の看護職，一般市民への活動の公開である。

これらの活動は，継続し定着してきており，教員間の学術的交流や，研究業績の積み重ねとしても成果を上げている。今後，学科独自のFDを継続するために必要な課題を明らかにする資料として，5年間のまとめを行った。

(キーワード) 看護学科，FD活動，5年間の評価，教育・研究の質向上

はじめに

看護学科教員の教育・研究能力を向上させるために，2004年度から，新見公立短期大学全体のFDだけでなく，看護学科独自のFDを計画し研修・研究担当者を配置した。その企画運営を担当する役割を学科分掌に位置づけ，看護学科内に「研究・研修委員」[注)]を設置したのが，2006年からである。今回は，看護学科における研究・研修に関する取組みを，2004年度から2008年度までの5年間についてまとめ，今後の学科独自のFDの課題を明らかにする。

Ⅰ．背景

看護学科は，看護専門職を社会に送り出すという重要な使命がある。そのため，指定規則で定められた実習科目が多く，教員は講義や実習，国家試験対策など，目前の教育を優先せざるを得ず，研究への取組みに対する時間的な余裕が持てない現状であった。2003年度に大学全体で実施された外部評価では，教育に関する高い評価は得られたものの，研究面ではいくつかの指摘があった。課題として挙がったのは以下の3点，①教員一人ひとりの研究業績の質の向上と研究の継続性，②研究論文を公表する際の全国的学術誌等の掲載誌の選択，③科学研究費等外部資金の獲得の必要性，であった。

外部評価で与えられた課題を克服し，教育の質を上げるための研究的取り組みや，知の生成としての研究など，教育と研究のバランスをとっていくための体制を取る必要があった。2004年度の学科運営の中に「研究・研修体制」を立ち上げたのが，学科独自のFD活動の始まりであった。2003年から継続して検討課題であった四大化という将来構想に向けて，教員の教育・研究の質を上げるねらいもあった。

Ⅱ．看護学科FD活動の目的と方法

1．目的

学科独自のFDの目的は，5年間の各年度で表現は異なるものの，以下の3点に集約される。

1）教員の研究体制を整え，研究業績をかさねることで，四大化に備える。
2）教員相互の学術的交流を深め，教育・研究の質を向上させる。
3）教員の教育・研究活動を実習施設看護職，地域の看護職及び一般住民へ公開し，学術的交流を深める。

FDの構造は図1に示すように，学生と教員を中心にその教育の質を向上させることが目的である。教育活動は，看護学科だけではなく他学科の教員と共同連携しながら行われるものである。その全体の質を上げることを目的とするのが大学全体のFD活動である。看護学科独自のFD活動は，学科教員の教育のみならず研究能力の向上と教員間

*連絡先：古城幸子　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

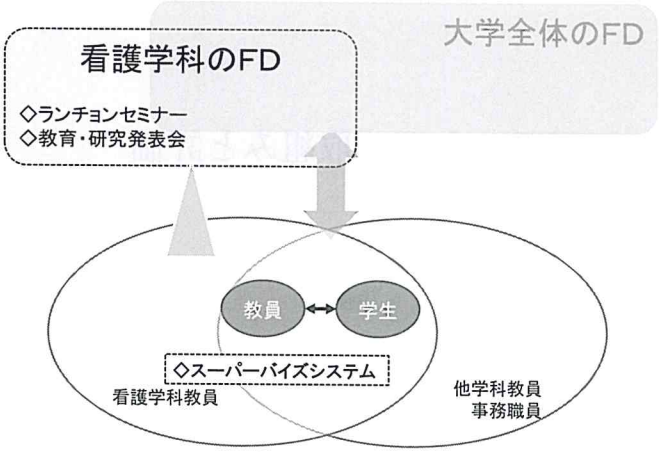

図１　看護学科 FD と学内 FD 活動との関係

の経験交流を目的とし，スーパーバイズシステムを取り入れ，ランチョンセミナーや教育・研究発表会の取組みを行うものである。

２．方法

１）教員の研究業績の質と量

各領域や自発的な研究グループを支援する。年間の発表論文の目標を設定し，紀要を基本に全国学会誌への投稿を行う。

２）毎月１回のランチョンセミナーの開催

月１回のランチョンセミナーにおいて，担当となった各教員がそれぞれのテーマで研究状況や教育の工夫などの学術的な交流を行う。

３）年１回の「教育・研究発表会」を開催

年１回の発表会において，教員全員がその年度に行った教育・研究実績を公開し，看護職や一般市民との交流を図る。

Ⅲ．看護学科 FD 活動の実績と評価

３つの取組みについて，その実績と評価を以下に述べる。

１．スーパーバイズシステム

１）スーパーバイズシステムの導入

2003年度以前は，研究に関しては，各教員が単独で，あるいは２～３名の教員が個別に集まって研究グループを作るなど，個人の主体的な取組であったが，組織的に，教員全体をいくつかのグループに分けて，教授・准教授がスーパーバイザーとなり，研究を支援する体制を作った。

スーパーバイズシステムは，教員の研究能力向上だけではなく，学生の「看護研究」に関する支援も含めた。これは，学生の履修進度にバラツキがあり，指導方法や指導内容に学生からの不満の声があったことも理由である。

スーパーバイザーの役割は次のように示した。

① 研究課題の提示

各領域で単独あるいは共同で行う研究課題について，各領域の教授・准教授が指導助言を行い，スムーズに研究が行われるような環境を整える。各領域数人のグループ内で研究テーマを検討し，又はスーパーバイザーが研究テーマを示し，共同研究を行う。また，個別に実施する研究テーマの指導助言を行い，目標に沿って進行しているかどうかの確認を行うこととした。

② 研究グループの主宰

教授・准教授は，研究テーマを学科に提示し研究グループを募る。教員は，領域を越えて関心のある研究グループに所属し，その主宰する教授・准教授の指導助言のもとで，研究活動を行う。スーパーバイザーはその研究グループについては責任を持って指導・助言を行う。

③ 学生の看護研究への支援

学生の研究指導は，指導しきれない部分について，スーパーバイズを受けるシステムを機能させる。教授・准教授は担当領域の教員の卒論指導が順調に行われているかを確認する。隔月に領域の各教員のゼミ学生が順調に履修を進めているかの確認を行う。研究が順調に進まない場合は，スーパーバイザーへの相談・助言を得て，学生が達成感の得られる科目修得になるよう支援する。

職位＼領域	基礎	基礎看護	成人看護	老年看護	地域看護	精神看護	母性看護	小児看護
教授	◎		◎ ◎	◎				◎
准教授		◎	○		○			
講師		○		○	○	○	○ ○	
助教			○ ○					
助手		○						

◎はスーパーバイザー
○はメンバーの教員

図２　スーパーバイズシステム2008年度

２）システムの実施と評価

教員の業績本数について，2004年度以前の５年間と学科 FD を開始してからの５年間について，本学紀要に発表分のみを図３で示した。前の５年間の平均は年間９本でそのうち共同研究が平均7.2本であった。2008年度は紀要の２号を出したこともあってさらに増加しているものの，体制後は年平均18.2本（２号分を省いても15.8本），共同研究が13.2本（２号分を省いても11.2本）と飛躍的に多くなっている。紀要以外の全国学会誌等，学外論文投稿数も増加している。学科教員個々の筆頭論文で，学外投稿論文数を数えたデータでは，図４のように FD 開始前では年間4.4本であったのに対し，FD 開始後では

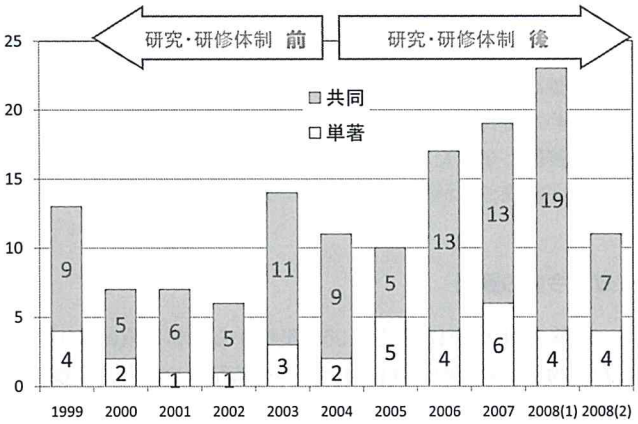

図3　看護学科教員の紀要投稿数

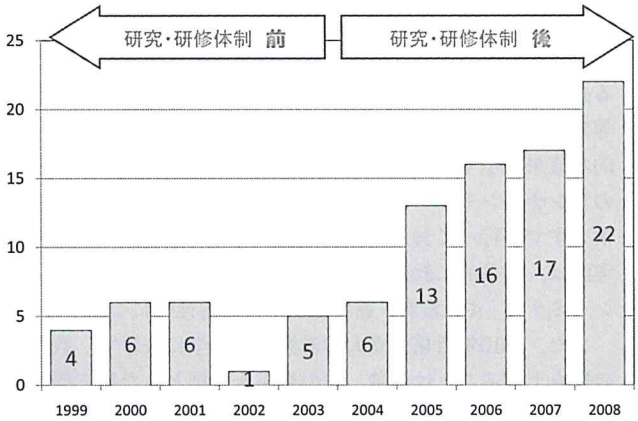

図4　看護学科教員の学外論文投稿数

14.8本と飛躍的に増加している。研究に取り組む風土は徐々に形成されてきたのではないかと思われる。

学生の「看護研究」科目の指導においては，スーパーバイズシステムが機能している領域もあるが，担当教員間に進度や指導内容に差がみられる部分もあり，今後の検討が必要である。

2．ランチョンセミナー

1）ランチョンセミナーの導入

2年間実施してきた研究・研修体制を発展させ，学科の役割として「研究・研修委員」を決め，年間計画として,「ランチョンセミナー」を実施することとした。定例の13時から開催する学科会議の前に，毎月1回12時15分から約40分程度の時間を使って，昼食を食べながら研修するという取組みである。

方法は，各月の担当者を決め，発表内容は担当者の自由とする。既に学会で発表した研究や，これから発表するもの,教育内容の工夫や新しい情報の伝達などである。

2）セミナーの実施と評価

表1示すように，2006年度は8回，2007年度は6回，2008年度はランチョンセミナー9回以外に，学外講師を招いた研修会を2回，SPSS 講習会を計5回行った。参加は強制ではなく自由としたが，講義や公務出張を除いて多くの教員が参加しており，お互いの情報交換や経験交流の目的を達成しつつある。ただ，2008年度の後期にやや出席者数が減少しているのは，長期病休者が複数名あったことが影響している。

学会発表前にランチョンセミナーに報告した教員は，「多くの意見や疑問点を指摘され，学会前に修正ができた」など，セミナー報告の意義を語っている。また，聞く側からも「領域の異なる教員の新しい研究課題を知ることができ，有意義であった」という反応も聞かれた。

3．看護学科「教育・研究発表会」

1）教育・研究発表会の導入

2006年10月に開催した短期大学公開フォーラムの中で，一般市民の方から「教員がどのような研究を行っているのか知りたい」という意見が出された。丁度，学科内でも，研修・研究体制を強化するために試行錯誤していた時期でもあり，ミニ学会の開催に関する案も出されていた。そのため早速，2007年3月に実施することとした。

2）実施と評価

会場は，第1回目は発表会単独で開催したが，実習施設の方々に多く参加してもらうために，2回目からは「実習施設連絡会議」と同日とし，3回目は会場として学術交流センターを活用した。資料2－1～3に示すように，第1回（2006年度）は，口演3演題，示説16演題，ポスター展示を2件行った。学科教員は17名全員が1～2演題を発表した。発表も含めた全参加者（図5参照）は67名であった。第2回（2007年度）は，口演4演題，示説13演題，ポスター展示を4件行った。学科教員は15名が参加し，全参加者数は68名であった。第3回（2008年度）は，示説のみとし，17演題，ポスター展示を3件行った。学科教員は15名が参加し，全参加者数は61名であった。

2006年度の第1回目は発表会だけの日程であったため，在学生の参加が多くみられた。しかし，現任看護職

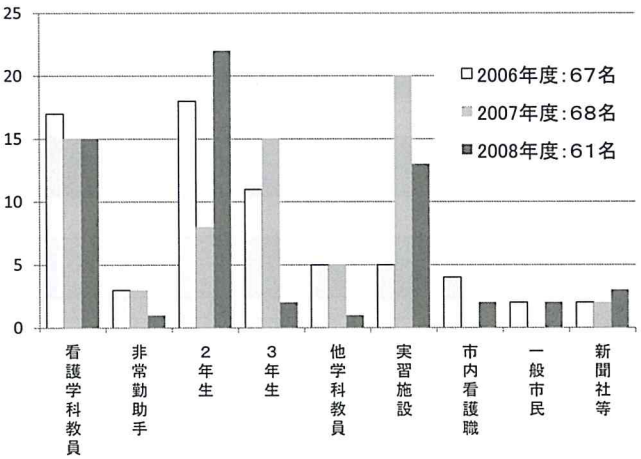

図5　「教育・研究発表会」の参加者の内訳

や臨床指導者への参加を期待し，２回目からは実習施設連絡会議を午前中に開催し，午後から発表会としたため，実習施設の看護師や臨床指導者の参加が多くなった。一方在学生の参加人数が年度によってばらつきがあるのは，２年生の再試日程や３年生の卒業式日程などの，開催日に影響されたためだと考えられる。

参加者の感想から，教員の仕事に関する理解ができたという一般市民の声として，“教員の研究・授業内容がよくわかった”“地域と密着した研究が多く，地域貢献がわかった”“看護学生の育成に力を入れていると感じた”などであった。また，看護職からは，“研究の視点が学べた”“発表方法が参考になった”などの，臨床看護研究への役立ちについての感想があった。さらに参加した学生の意見では，“自分たちの経験したことが研究に用いられていたので，理解が深まったし，興味を持つことができた”“より良い看護教育を目指そうとしているんだなと思った”“今後の実習にもつながるような気がした”などの，教員に対する認識の変化や学生自身の今後の方向性を考えたという感想が多く寄せられた。

参加者の満足度は，２・３回目と調査項目が異なるため比較はできないものの図６・７のように，80%を超えて満足と回答した参加者が多かった。

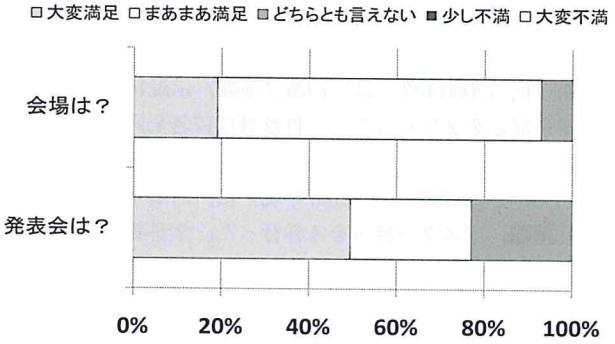

図６　第２回発表会参加者の満足度

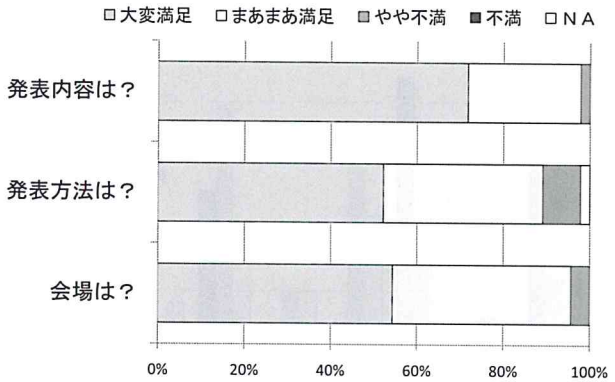

図７　第３回発表会参加者の満足度

４．その他の取組み

上記の取組み以外に，学科内有志で取組んでいる「英語論文抄読会」がある。これは1999年頃から３つのグループで始めたものの，どのグループも徐々に継続できなくなり，一旦解散となった。現在は2008年度から新たに１つのグループが結成され活動を継続している。

Ⅳ．今後の課題

看護学科の FD として2004年度から独自に取組んできた活動は，以上のように徐々に実を結びつつあり，今後の継続が重要である。そのために，研究・研修委員の果たす役割は大きく，新しい工夫や企画が問われることになる。

学科としての目標は，まず教員各自の研究業績力を高めることで，年間に単著または筆頭論文を最低２本は発表することを原則に，共同研究などのプロジェクトを立ち上げる必要がある。また，外部評価で指摘された③科学研究費等外部資金の獲得の必要性について，今回の評価では具体的な成果を示すことができなかった。そのため，2009年度のランチョンセミナーで科研費への取り組み強化の話題提供をすでに行っており，意識強化に努めている。これらの実践は，結果的に教員の教育研究力を向上させ，「ランチョンセミナー」や「教育・研究発表会」の活性化につながる。

また，2010年新見公立大学看護学部開学にむけて，教育の質を上げることは勿論，知の生成を目標とした研究機関としての使命を果たすために，看護学の発展に寄与する研究を実践することに力を注ぎ，大学の価値を高めることに努力していきたい。

注）研究・研修は，2004年から2005年が古城幸子，2006年から2007年が杉本幸枝，2008年が内藤一郎，木下香織が担当者として企画運営を行った。

表1　ランチョンセミナー

2006 年度

回	開催日	担当者	テーマ	参加人数
第1回	5月24日	岡本亜紀	精神病院との交流体験を持つ小学生の精神障害者理解	15名
第2回	6月28日	古城幸子	看護学生が在宅高齢者の生活圏域で実施する「サテライト・デイ」での教育効果～学生の自己評価調査を分析して～	12名
第3回	8月9日	岡　宏美	看護基礎教育「看護研究」の卒後の研究活動への役立ち～過去5年間の卒業生を対象とした調査から～	15名
第4回	10月11日	上山和子	小児看護学実習に事前演習を取り入れた学習効果～演習前後の調査より～	19名
第5回	11月15日	杉本幸枝	基礎看護学実習1－Bの指導と看護診断の理解	13名
第6回	12月13日	宇野文夫	短期大学看護学科学生の高等学校における理科履修科目と科学リテラシーに関する調査	16名
第7回	1月24日	岡　宏美	カンボジア・スタディツアー報告	16名
第8回	2月14日	難波学長 逸見英枝	看護研究集録および事例研究について	16名

2007 年度

回	開催日	担当者	テーマ	参加人数
第1回	4月25日	古城幸子 杉本幸枝 貞岡美伸	大学視察の報告	18名
第2回	5月23日	木下香織	第96回看護師国家試験の分析と今後の展望	16名
第3回	6月27日	難波学長	医療安全	21名
第4回	12月19日	古城幸子 杉本幸枝 岡本亜紀	GP 報告	17名
第5回	1月23日	岡　宏美 掛屋純子	GP 報告（その2）	16名
第6回	2月27日	逸見英枝 栗本一美	GP 報告（その3）	13名

2008 年度

回	開催日	担当者	テーマ	参加人数
第1回	4月23日	古城幸子 杉本幸枝 木下香織	学生支援 GP への申請内容について	12名
第2回	5月28日	宇野文夫	電子カルテ教育システムによる看護基礎教育 - その展望と課題 -	12名
第3回	6月25日	小野晴子	精神看護学教育における学びの三位一体論の授業実践	約11名
第4回	7月9日	内藤一郎	細胞外マトリックスと疾患	約11名
第5回	8月27日	上山和子	基礎看護教育修了時の職業的アイデンティティ形成の研究	約8名
第6回	9月24日	澤田由美	卒業研究から見た精神看護学領域における看護研究の動向	約9名
		栗本一美	地域看護に関する学生の看護研究の動向	
		木下香織	老年看護学療育における学生の卒業研究の動向	
第7回	10月22日	内藤一郎	卒業研究で用いられた実験研究の動向	約9名
第8回	11月26日	宇野文夫	到達度試験の意義と試験作成の方法	約8名
第9回	12月24日	古城幸子	キャリア形成を促進する看護基礎教育への課題 - 短大卒業生の母校四大化への期待 -	約8名

2008 年度　研修会

回	開催日	講演者	テーマ	参加人数
第3回	6月18日	岡山大学 加藤久美子先生	看護学科教員の教育・研究の質を高めるために	21名
第5回	6月27日	福山平成大学 橋本和子先生	看護学科教員の教育・研究の質を高めるために　　その2	13名

表2-1　教育・研究発表会

2006年度

第1回　新見公立短期大学看護教員の研究・授業内容発表会

期日：2007年3月8日、13：20～15：20

場所：学生会館大ホール

［口演　発表］

宇野文夫：看護学生の科学リテラシー

金山弘代：「口腔ケア演習」導入後の口腔ケアに対する看護学生の認識の変化

貞岡美伸：出産に関連した学生の認識

［示説　発表］

古城幸子：山間地域の在宅高齢者の健康・生活に関する意識
～その2　要介護認定を受けている高齢者の調査～

土井英子：山間地域での遠隔医療支援に向けた携帯型テレビ電話の可能性
～訪問看護利用者と介護者への調査～

太田浩子：山間地域の在宅高齢者の健康・生活に関する意識
～その1一般高齢者への調査～

逸見英枝：成人看護学におけるヘルスプローションについての教育方法の評価

白神佐知子：成人看護学における体験学習の効果

掛屋純子：前立腺がん患者の自尊感情に関する研究
～排尿・排便・性機能、精神的負担感が及ぼす影響～

古城幸子：在宅要介護高齢者の家族の介護意識と支援への課題

木下香織：3年課程の2年次老年看護実習での学生の高齢者理解

栗本一美：看護学生が在宅高齢者を対象に主体的に取り組んだ
「サテライト・デイ」における学習効果

岡本亜紀：地域分散型サテライト・デイに参加した在宅高齢者の健康チェック評価
～山間地域A地区の高齢女性の血圧・体脂肪について～

小野晴子：精神看護学実習における学生－患者の距離に関する認識調査

岡本亜紀：精神病院との交流体験を持つ小学生の精神障害者理解

上山和子：小児看護学実習に事前演習を取り入れた学習成果
～演習前後の調査～

杉本幸枝：卒業時の看護技術経験度と到達度

真壁幸子：看護師の仕事への行き詰まり感の実態とその要因
～卒後5年目までの課題に焦点を当てて～

岡宏美：看護基礎教育「看護研究」の卒後の研究活動への役立ち
～過去5年間の卒業生を対象とした調査から～

［ポスター展示］

◇カンボジア会：2006年～2007年　活動報告

◇現代的教育ニーズ取組支援プログラム：平成18年度の選定についての報告
「地域のニーズに応える看護専門職養成」
－在宅高齢者支援プログラムとサービス・ラーニング－

表2-2　教育・研究発表会

2007年度
第2回　新見公立短期大学　看護学科「教育・研究発表会」

日時：2008年3月14日（金）13：00～15：00
場所：新見公立短期大学　学生会館大ホール

［口演　発表］

宇野文夫：電子カルテ教育システムを用いた看護基礎教育の展望と課題
小野晴子：精神看護学実習における距離観形成
金山弘代：成人看護学実習における医療事故防止の取り組み
貞岡美伸：日本における臨床倫理コンサルテーションの活動

［示説　発表］

逸見英枝：「医療概論」における教育的効果　－学生のレポート内容を分析して－
古城幸子：高齢者理解を広げる映画教材の教育効果
栗本一美：「健康教室」演習を取り入れた教育効果
－学生の自己・他者評価を分析して－
岡本亜紀：精神障害者を支える家族の生活困難
上山和子：小児看護学実習に事前演習を取り入れた学習成果（その２）
－演習プログラムを用いての縦断的調査－
土井英子：学生同士で行う採血演習の効果と課題
－注射法の看護技術習得に実技試験を取り入れて－
中山亜弓：模擬患者（SP)を活用したコミュニケーション演習の学びの分析
－基礎看護学実習後の振り返りを通して－
岡　宏美：母性看護学実習における学内演習の検討
杉本幸枝：基礎看護学実習の受持患者の分析
白神佐知子：臨地実習における看護学生の食習慣を中心とした健康管理
－成人看護学実習と授業課題の関連性－
木下香織：老年看護学臨地実習に導入した「利用者体験」での学習効果
掛屋純子：居宅介護支援事業所実習での看護学生の学び
－地域看護実習記録の分析から－
真壁幸子：3年課程看護基礎教育における「看護研究」の教授方法に関する全国調査

［ポスター展示］

◇岡宏美：カンボジア研修報告2007
◇平成18年度現代GP選定：地域のニーズに応える看護専門職養成
－在宅高齢者支援プログラムとサービス・ラーニング－
◇平成19年度現代GP選定：電子カルテ教育システムによる看護基礎教育
－個別的・双方的手法で医療情報と看護を学ぶ教育改善指向型プログラム－
◇平成19年度特色GP選定：質の高い看護職養成のための看護研究
－主体的課題発見能力を育てる学習支援－

表2-3　教育・研究発表会

2008年度
第3回　新見公立短期大学　看護学科「教育・研究発表会」

日時:2009年3月12日(木)　13:30～15:30
場所:新見公立短期大学　学術交流センター　3階

【示説　発表.】

古城幸子：キャリア形成を促進する看護基礎教育への課題
　　－短大卒業生の母校四大化への期待－
上山和子：看護基礎教育課程修了時の職業的アイデンティティ形成に関する研究
　　－専門職としての意識－
土井英子：カリキュラム改正前の卒業期における看護学生の「看護理論」の学び
内藤一郎：Alport症候群患者数の推計
宇野文夫：新たな教材としての電子カルテ教育システム　開発の現状と今後の展望
小野晴子：成人看護学A(循環障害のある患者の看護) 授業研究
金山弘代：成人看護学教育に関する研究
逸見英枝：看護学生の事例研究への取り組みの意味
　　－A短期大学看護学科における事例研究の内容分析から－
山縣由子：A短期大学看護学科における卒業研究の動向
　　第二報　　生活習慣病に視点をおいた分析から
掛屋純子：A短期大学看護学科における卒業研究の動向
　　第三報　　がん看護に視点をおいた分析から
岡　宏美：妊婦がもつパートナーへの関係性と不安への影響
杉本幸枝：基礎看護学実習における学生の困難さの分析
栗本一美：学校保健室実習における学生の学び
澤田由美：精神看護学実習における学生の学び
木下香織：看護学生の高齢者虐待への認識
　　第2報　　紙上事例　－認知症高齢者への対応－
古城幸子：看護学生の高齢者虐待への認識（第1報）
　　－紙上事例を用いた横断的認識度調査－
内藤一郎：潰瘍性大腸炎粘膜基底膜のIV型コラーゲンα(IV)鎖解析

【ポスター展示】

◇平成18年度現代GP選定地域のニーズに応える看護専門職養成
　　－在宅高齢者支援プログラムとサービス・ラーニング－
◇平成19年度現代GP選定：電子カルテ教育システムによる看護基礎教育
　　－個別的・双方的手法で医療情報と看護を学ぶ教育改善指向型プログラム－
◇平成19年度特色GP選定：質の高い看護職養成のための看護研究
　　－主体的課題発見能力を育てる学習支援－

Five Years' Activities and the Evaluation of Faculty Development in the Nursing Department — activity report on "Research・Training" system —

Sachiko KOJO, Yukie SUGIMOTO, Ichiro NAITO, Kaori KINOSHITA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This report is about five years' activities of faculty development which the nursing department has conducted since 2004. The department built "Research・Training" system into its policy of operation for the purpose of improving teachers' ability to teach and research. Also, in 2006, 'Research・Training committee' was set up as the office which makes plans of research and training and carries them out. The activities include building 'Supervising system' and putting it effectively into practice, holding 'Luncheon seminar' in which teachers enhance their research capacities, and holding 'Meeting for education and research" where our activities are shown to the public and local nurses.

These activities are continually carried out and have built up, and help teachers with their academic interaction and research achievement. This paper sums up our five years' activities as the material which clarifies future issues needed to continue the department's own faculty development.

Keywords: the nursing department, faculty development activity, the evaluation of five years' activities, enhancing education and research